スラブ・ディフェンス

小松幹生

N署、取調室。
刑事岸田と被疑者水上。
岸田、マッチの箱をもてあそんでいる。
その単調な音。
互いに相手をじっと見るが　時間がずれていて視線は合わない。
そのうち、しかし、目が合う。
今度はどちらも仲々視線をはずさない。

水上　なんだい？
岸田　……
水上　なんだよ？
岸田　……どういうことだよ。
水上　なにが？
岸田　なにが？……気にくわねえな。
水上　笑ったように見えたからさ、ちょっと聞いてみたんだよ。何か、楽しいことでもあったのかなと思ってね。
岸田　……へえ。なるほど。（うすら笑いで相手をじっと見ている）

水上　……なんだよ。
岸田　聞くのはこっちの役目だ。
水上　じゃ、ちゃんと聞けよ。
岸田　聞いたって答えねえじゃねえか。
水上　……
岸田　名前は？
水上　……
岸田　言ってみろよ名前を。
水上　岸田、岸田三郎。
岸田　そりゃ、おれの名だろう。
水上　忘れたんなら、彼女にでも聞いてみたら。
岸田　……彼女？
水上　……奥さん。
岸田　……
水上　なんだい。
岸田　いま、おれの腹わた煮えくりかえってるの判るか。
水上　なら笑ってないで怒れよ。
岸田　ここをどこだと思ってるんだ？

水上　……
岸田　名前は？
水上　判ってることを聞くなよ。
岸田　……名前は？
水上　……変わったな。
岸田　お前は変らないよ。昔と同じだ。鼻持ちならねえ。
水上　……昔からそう思ってたのか。
岸田　思ってた。
水上　知らなかったな。
岸田　さあ答えろ。名前は？
水上　話をする雰囲気じゃないな。
岸田　話じゃない、取り調べだ。
水上　記録とる奴がいないじゃないか。
岸田　自供をはじめたら連れてくる。
水上　……
岸田　名前ぐらい、すぱっと言えないのか。
水上　言えないね。
岸田　なぜ？

水上　……

岸田　……お前、感ちがいするなよな。同窓会やってるんじゃないぜ。

水上　同窓会で今のような口のきき方してみろ、ただじゃおかねえよ。

岸田　……

水上　昔より辛抱づよくなったみたいだな。

岸田　お前、自分が何をやったのか、判ってるのか。

水上　何もやってないよ。

岸田　判っていってるのか。

水上　何もやってない。

岸田　そう。なんにもやっちゃいない。やれるわけがないんだ。何かをやった奴にくっついてた、それだけだ。昔も今もおんなじだ。でかい面してたって、なんのことはない、使いっぱしりだ。……お前な、名前も何も言わなくてもきょうはもう帰しちまう予定だよ。どうでもいいんだから、お前のことなどは。名前と住所を言って、早く帰って彼女の行方でも探した方がいいんじゃないのか。

水上　……

岸田　大庭典子。いくつ年が違う？　向うにとっちゃちょっと便利に使った行きずりの中年男でも、お前にとっちゃ大事な恋人だろう。どこにもいないぞ。

水上　……

岸田　あんまり、つっぱるなよ。
水上　ほんとに帰してくれるのか。
岸田　名前は？
水上　水上、明。
岸田　年齢、
水上　三十八。
岸田　住所。
水上　……
岸田　どうした？
水上　書かないのか。
岸田　判ってることを書いたってしょうがないだろう。住所は？
水上　……
岸田　住所だよ！
水上　……練馬区練馬……
岸田　もういいよ。あとはいい。判ってる。
水上　……
岸田　タバコ喫うか。
水上　……いらない。

岸田　お前、なに考えて生きてるんだよ。十年連れそった女房と小さな子供を捨てて、何者かも判らないあばずれの尻（ケツ）おっかけて、揚句に、なんだ、仕事も首だそうじゃないか。どうするつもりだ？……どこがいいんだよ、あんな女。

水上　……

岸田　ちゃんと、やらせてもらってたのか。

水上　タバコくれ。

岸田　（一本渡して、火を点けてやる）奴には男がいた。これが組織の多分ボスだ。通称を滝田、爆弾づくりの名人だそうだ。しかし、大した女だよな、十年の間、日本全国を一緒に逃げ回ってる男がいて、それも思想的に芯から共鳴してというわけでもなく、そうなんだぜ、要するに惚れた男がやってることだから付き合ってるってところだよ、そういう男がいて、惚れて一緒に生きてる男がいて、行きずりのお前のような男と、けっこう本当みたいな顔して同じ部屋に寝起きして。……どんな顔してやらせてたんだよ。

水上　いうことに気をつけろ。典子はそんな女じゃない。

岸田　へえ。……すると、金をみついで、生活を助けてやって、その他もろもろ面倒みてやって、見返りは無しか。

水上　……おれが、そうしたくて、そうしてるんだ。

岸田　水上明、典子なんてアパートのドアに表札出して、夫婦気どりだったっていうじゃないか。……惚れてたのか？

水上　……

岸田　まさか、名前貸して隠れ家を提供してただけじゃないよな。お前みたいな奴が、その年になって女房子供を捨てて活動家になるわけはなし、かと言って及ばずながら、せめてお手伝いなりともさせていただきたいなんてことでもない、そうだろう。要するに若い女にひっかかって利用されてだまされた。

水上　……。

岸田　もう戻ってはこないぜ。

水上　戻ってくる。

岸田　信じたいよなあ、そりゃあそうだ。

水上　半年一緒に暮したんだ。あれは嘘じゃない。

岸田　嘘だよ。

水上　ちがう。

岸田　ちがわないね。

水上　他人のお前に判ることじゃない。

岸田　だってお前、やらせてももらえなかったんだろうが。

水上　……三回ぐらいはやってる。

岸田　判った！　それが女の手だよ。

水上　なにが？

岸田　しょっちゅうでは男はすぐにあきる、かといってまったくのなしでは、繋ぎとめておけない、そこで二ヵ月に一度くらいの割で、ちょいとエサを与えてやる、男は今度はいつかとひたすら待って女の顔色をうかがいながら、なんでも相手のいうとおりだ。そうだろう？

水上　……ちがう。

岸田　どこが？

水上　二ヵ月に一度じゃない。

岸田　だって六ヵ月を三で割れば……

水上　初期に立てつづけで……

岸田　あと、なし？

水上　そう。

岸田　うーん……それは又きつい。

水上　それも同じ部屋に寝おきしていてなんだから。

岸田　六畳？

水上　四畳半。

岸田　あらあ。

水上　ふとんは一つだし。

岸田　それはまた。

水上　こんなせまい奴。

岸田　おうおう。
水上　ぴったしだからね、ぴったしくっついて寝てさ。
岸田　それで、こうか。（ひじ鉄）
水上　六ヵ月。
岸田　最初はやらせて。
水上　こんだけ。（指で三つ）
岸田　あと、これ。（ひじ鉄）
水上　よく頑張ってると思うよ。
岸田　昔からお前は辛抱づよいから。
水上　いやいや。
岸田　いい女だもんな。
水上　な。
岸田　で、お前、どうすんだよ、これから。
水上　……探すよ。
岸田　……探して？　……やりたいのか。
水上　それ以上、汚ねえ口きくんじゃねえ！
　　しばし黙ってタバコに火を点けて、
岸田　滝田という男には会ったか？

水上　……

岸田　こういう顔だ。（と写真を）

水上　……

岸田　お前などにわざわざ会いに来るはずはないが、何かのおりに、どうだ？

水上　会ったよ。

岸田　……なに？

水上　会ったことはある。会いたいというんでね。でも知らないよ、今どこにいるかは。

岸田　向うから会いたいと……？

水上　こっちもちょっと興味はあった。

岸田　いつ？

水上　大した野郎じゃないよ。背は高い。それが取り柄だ。一八〇以上あったんじゃないかな。

岸田　いつだよ。

水上　五月の初め。大学の時こんなことがあった。例の紛争の時だ。文学部の学生食堂の隣りに牛乳なんかを売ってる喫煙室といった風な小さなたまり場があるんだが、ここにススっと入ってきた男がいた。文学部の自治会の委員長だ。奴もひょろっと背が高かったが、当時文学部はカクマルだ、こいつ、タレ目の黒いサングラスをかけて、入ってくるなり壁に背をこう張りついて、外をうかがってやる。その時アッと思ったね、子供の頃の遊びを思い出したんだよ、警官ごっこだ。どろぼうごっことも言ったがな。大人が寝しずまった夜に二十人ばかりで町の路地から路地、橋

の下から土管をくぐって追いかけっこをやったろう、武器はせんだんの実のぶんやだった、覚えてるか。

岸田　忘れた。

水上　まるでさ、サングラスをかけて壁に身を張りつかせて、外をうかがってるところは、子供が遊んでるのとおんなじだったよ。野郎め、子供のころ遊んでねえなと、そう思った。

岸田　なんの話だ？

水上　滝田だっておんなじだよ。大した野郎じゃねえよ。

岸田　話をしたのか。

水上　……話したくないな。

岸田　五月の？……いつだって？

水上　五日。子供の日だ。

岸田　どこで？

水上　馬場のコーヒー屋だ。

岸田　何時ごろ？

水上　朝九時。開店と同時だよ。そういう向うの指定だった。

岸田　大庭典子を通じて？

水上　前日の夜にね。

岸田　どっちが先に待ってた？

水上　四十分待たされたよ。人を待たせて、じらして、揚句、平然とした顔でやって来たよ。作戦だな。こっちだって、待たされたからといって会いたい相手に会おうというんじゃなし、向うがそういうから暇つぶしにコーヒーでもと思っただけなんでね、別にじれやしなかった。作戦といったところが意味もなかったわけだ。おかしかったね、待たしてじらした効果やいかに、明らかにそういう目付でこっちをうかがってやがった。……

岸田　作戦とは、しかし、どういう意味だ。なぜ、奴がお前をじらす必要がある。

水上　なぜかな。おれも奴にきいてみたいよ。俺みたいなさ……

岸田　俺みたいな？　俺みたいな何だ？

水上　……昔の話をきかれたよ。

岸田　……？

水上　高校の時のさ。

岸田　高校の？

水上　どんな仲間がいたか。まさかお前の名前は言わなかったが、ちょっとね、話してやった。

岸田　勤評の？　あの仲間か？

水上　覚えてるか？

岸田　……判らんな。

水上　潜伏の助けになる人間を探しているんだよ。仕方がないから、二、三、名前は教えてやった。

岸田　……

水上　いい気なもんだよ。おれが、あのころのおれたちの活動を話してやったって、ふんふんと鼻で
　あしらってやがって、なに、その時の仲間の名前と今の住所が判ればときた、自分のために役に
　立つことのほかは用がねえんだよ。
岸田　……役に立って、よかったな。
水上　……どういう意味だ。
岸田　……よかったんだろう、役に立って。
水上　面白くねえな……
岸田　で、話はそれだけか。
水上　……タバコばかり何本も喫って、大庭をよろしく、かっこうつけて帰ってったよ。
岸田　タバコはショートピースだ。
水上　……さあ、両切りの奴だったことは確かだが。落ちついたふりしてても、あの吸いがらの山は
　やっぱりなと思ったよ。
岸田　……(笑っている)
水上　大した野郎じゃねえよ。
岸田　お前も淋しい野郎だよな。みじめだぜ。
水上　……お前と同じだ。
岸田　おれは妙な嘘はつかないね。教えてやろうか。滝田は数年前に胃を患らった。神経性の胃炎だな。胃潰瘍の寸前、もう少
　しで穴のあくところだ。それでなピースはやめて、マイルドセブンに

したんだよ。吸い口がついてる。両切りじゃねえんだ。な?……会ったなんて、なんでそんな嘘をつく?

水上　……

岸田　滝田が、向うから、お前に会いたい、笑わせるんじゃねえよ!

水上　……

岸田　うす汚ねえ野郎だ。

水上　……

岸田　恥かしいっちゃねえや。

水上、突然立ち上がって、

水上　黙れ、馬鹿野郎!(歌う)

どうして俺が恥かしい
俺のどこがうす汚い
なぜ今ひとに
さげすみを受ける
なぜ　なぜ　なぜ
ちくしょうめ!

子供のころは可愛くて
高校時代は純情で
大学出ても、まっすぐで
会社づとめは勤勉で
結婚したら嬉しくて
子供ができて仕合わせで
年月(とし つき)過ぎて気がついて
これでいいかと気がついて
かほど純粋なこの俺が
どうして俺が恥かしい
俺のどこがうす汚ない
なぜ今ひとに
さげすみを受ける
なぜ　なぜ　なぜ
ちくしょうめ！

岸田　女房は元気か？

水上　……

岸田　元気か、女房は。
水上　だれの？　お前のか？　元気だったよ。
岸田　……
水上　まだ若いな、充分に。ここらへんに（腹）、ちょっとたるみが出来たけどな。
岸田　……
水上　どうかしたか。
岸田　パンチを喰らわせたつもりか？
水上　きいたか？
岸田　……咲子は十年も前からここはたるんでるよ。いつ会った？
水上　家を出たんだって？
岸田　いつだ！
水上　……真っ昼まだ。
岸田　……
水上　なにもしちゃいないよ。
岸田　……
水上　ちょっとな、たるんだ辺りを撫でさしてもらったけどな。
岸田　……ふざけるなよ。
水上　タバコくれ。

岸田　（ともかく、そうする）……それで、滝田には結局会ったことはない。そうだな？
水上　咲子に？
岸田　滝田にだ。
水上　あんな男に興味はないよ。
岸田　じゃ、誰に興味があるんだ？
水上　……答えていいのか。
岸田　言っとくが、おれの女房を呼び捨てにするな。
水上　……もう帰してれよ。
岸田　ダメだ。
水上　約束がちがうじゃないか。……
岸田　咲子に逢ったというのは、ほんとうなんだな。
水上　ああ……逢ってくれと言うからさ。
岸田　……向うから？
水上　おれから声をかけるわけがないだろう。
岸田　なぜ？
水上　なぜったって……
岸田　高校の一年後輩で、二十年前に因縁があって、ここ三年もちょくちょく逢ってた！　ちがうか……

水上　昔のことは忘れたし、ここ二、三年といったって、なにも逢い引きしたのじゃなくて、たまたま電車の中とか、デパートとかで行き会って――

岸田　待てよ。昔のことは忘れた？　お前な、忘れたとはおれは言わせないよ。

水上　岸田。

岸田　なんだよ。

水上　二十年も昔のことだぞ、何があったにしても、とっくに忘れていい時間が――

岸田　待てよ。何があったんだよ。

水上　何があったにしても！

岸田　あったんだよな！　何かが。

水上　忘れたと言ってるだろうが。

岸田　嘘つけ。

水上　……なんにもなかったよ、あるわけないだろう。

岸田　なぜ？

水上　……おかしな質問するなよ。

岸田　ちっともおかしかない。なんにもなかったあるわけがない、なんて言えるのは、だってこう見えても俺はほんとは女だものとか、実は咲子には穴がないんだとか、そういう場合だけだろう。お前、女か？　え？　どうだ？

水上　そりゃ、男だよ。

岸田　そうだろう。で、咲子は、ないか？

水上　そりゃ、あるよ。

岸田　野郎、ひっかかりやがった。……なぜ、あると知ってる？

水上　本人があると言ってた。

岸田　……なんだ、そりゃ。

水上　冗談だよ。やめよう、もう。

岸田　……水上よ。

水上　なんだよ。

岸田　おれな……苦しいんだよ。毎晩眠れないんだ。咲子が家出したからじゃない。家を出てくれて顔を見なくてすむのは、むしろ有難いと思ってる。そうじゃないんだ。……もうなあ、五年つづいてる。五年間だ。五年間、ずうっと、あいつを疑ってる。たまんないよ、もう。ほんとになあ、眠れないんだ、胸んとこがよ、こう、きゅうんと苦しいんだよ。奴はおれと結婚したけど、ほんとは別に好きな男がいたんじゃないか、男はおれしかないなんて言ってたけど、実は他にも寝てた野郎がいたのじゃないか。……知りたいんだよ、真実を。水上よ。

水上　なんだよ。

岸田　お前サッコと寝たことあるんだろう？　いいんだよ、ほんとのこと言ってくれて。ああじゃないか、こうじゃないか、ふらふらうじうじ考えているのが耐えられないんだ、寝たなら寝た、それがはっきりしたら、すっきりする。すっきりしたいんだよ。な、昔、あの時、自治会室で、

あったんだろう？

水上　……いつのことを言ってるんだよ。

岸田　昭和三十五年九月三日水曜日午後五時三十五分から約二時間四十分の間。……覚えてるんだよなあ、ちくしょう。

水上　つらい男だなあ。

岸田　どういう日か思い出させてやる。勤務評定の問題で学校が一年間もめつづけたのは、まさか忘れちゃいないだろうな。

水上　おれ、副委員長だぜ。

岸田　よし。夏休みが終った新学期の最初の執行部会議、議題は夏休み中に起きた、日高組の教師たちによる校長監禁事件に対する処分の不当性に関して。これをいかに全生徒に訴え、いかに撤回にまで持ってゆくか。ポイントはこうだった。社会科教師、尾崎の報告によれば、暴力をもって校長を校長室にその意志に反して長時間閉じこめたというのがその処分理由だが、処分された教師十一名のうち、実はその日その現場に居合せなかった者が間違ってはいっていた。即ち、いい加減な校長の報告を無責任に受けた県教育委員会の、この処分がいかにでたらめなものであるかのそれが証拠である。

水上　そうじゃないよ。ポイントは、むしろ、こうだよ。即ち、なぜ、教師の問題が生徒会に持ちこまれなくちゃならんのか。日高組という立派な組織もあるじゃないか。しかも、ちゃんとした大人だろう、それが十六、七の子供に助けてくれとは一体なにごとか、まして、そのために授業ま

でつぶして生徒総会を開いてくれとはどういうことだ。教師の問題は教師でやれ。それがおれの意見だよ。

岸田　職員会は、だって日高組と独協にまっ二つに分裂してて何にも決められないじゃないか。

水上　だから生徒会に泣きついてる。判ってるよ、それは。

岸田　待てよ。これは、いいか、根本的には勤務評定は是か非かという問題だよ。

水上　勤務評定が最か非かというのが問題だとすれば、それは一日生徒総会をやって決めるようなことがらではなくて、長い勉強のなかで考えてゆくことじゃないのか。だから――

岸田　だから、考えてゆくその一歩として、まず生徒総会を開き、いかに校長が、教育委員会がしいては権力というものが、でたらめで恐ろしいものか、それを暴くことが大事じゃないのか。

水上　だれに教えてもらったんだよ、自分の言葉でしゃべれ。

岸田　とにかく、これは教師だけの問題じゃないんだ、勤務評定というのは、むしろ、我々、これからの世代にとってこそ重大な問題なんだから。

水上　勤務評定は戦争に結びつく、そういうわけだ。

岸田　水上、コトは重大で、我々は真面目なんだぞ。

水上　おれは人間というものを、もっと信じてるんだ。勤務評定によって権力が教育を支配し、思うように若者を育て、世の中を戦争へとひっぱりこんでゆく――よしんば権力というものが実在して、教育を支配しようとしたとして、この今の世の中で、人々が、一般の人々が、そんなに簡単に権力とやらに支配されるものだろうか、おれはそうは思わない。

岸田　だって、たとえば現実に、勤評に反対して正しく闘った教師たちが二人は十ヵ月の停職、九人は減俸、そういう処分を受けている。

水上　それが支配されてるということか。

岸田　そうだよ。そうやって少しずつ世の中を戦争の方向へと曲げてゆくんだ。

水上　誰が？　何のために？

岸田　権力者が。自分たちの利益のために。

水上　おれは信じないね。人間が自分の利益のために世の中を戦争へ追いやる、そんなことがあってたまるものか。

岸田　未来の空想の話をしているんじゃないぞ。今までに歴史の中で事実あったことだ、そして今同じことがくり返されようとしている、お前にはそれが見えないのか。

水上　……おれは人間を信じてるよ。

岸田　じゃ、なぜ、今、勤務評定なんてものが出現して来たんだよ。

水上　間違っていると思うなら闘えばいいだろう。闘ってやめさせればいいだろう。やめさせることができなかったら、それは、負けたというだけだよ。

岸田　負けちゃいけないんだよ。

水上　負けたら、それは、人間というものが今まだそれだけの者だったということで、仕方のないことだと思う。

岸田　情けないな……

水上　ちっとも情けなくはない。偉そうな口きくんじゃねえよ。

間。

岸田　ふざけてないで、話を真面目なところに返そう。

水上　……

岸田　あの日、五時すぎに会議が終って例によって字の上手いサッコがガリ切りで、お前が刷りを手伝うために居残った。そしてとっぷりと日の暮れる八時過ぎまで二人は一歩も部屋を出なかった。そうだな？

水上　下らない話はやめよう。

岸田　八時ごろ、家のフロが壊れて、たまたま銭湯に出かけた陸上部の本田の奴が学校の前を通りかかると自治会室に明りがついていたから、おやと思って立ち止まった。誰が残ってるのか確かめてやろうと思って奴はしばらく塀のそばにいる。本田の奴はサッコに気があった、だからそうしたんだ、見ているとやがてサッコとお前が寄りそうようにして出てきた。

水上　やめろと言ってるだろう。

岸田　ポイントはこうだ。あの時の経過報告は原紙で五枚、いつものサッコのペースなら一時間半の分量だ、五時半から切り始めたとして七時には終る。七時から八時十分までの一時間十分を、それでは二人は何をしていたか。印刷はしてはいない、なぜなら次の朝刷り物を手にした時、まだインクが乾いていなかった。刷りにかけたのは、だからその夜ではなくて次の朝早くだということになる。では、自治会室で、夜の七時から八時過ぎまで二人は何をしていたのか。…どうだ！

水上　……それ以上、穢すことはやめろ。
岸田　……けがす？
水上　そうだ。
岸田　…誰を？
水上　おれたちを。
岸田　お前と？……咲子を？　おれが……？
水上　おれとお前をだよ。
岸田　お前と、おれ？
水上　そう。
岸田　……おれがお前と咲子を疑うことが、おれたちを、けがすことになるというのか。
水上　そうだ。
岸田　……すると、おれたちってのは、そんなに神聖犯すべからざるものだったわけか。
水上　……
岸田　え？　どうなんだよ。
水上　……おれたちは、未熟だったけれど、おれたちは……神聖だった。
岸田　おれたちは、おれたちはなどと、おれをお前と一緒にしてほしくないな。おれはお前のような偽善者じゃない。神聖だと？土壇場でおれたちを裏切ってシッポを巻いて独協側についた野郎が神聖だっただと？

水上　なんのことだ？
岸田　忘れたのか！　同じ年の十月二十五日、バス十七台を借り切って全校生徒八百名で県教委に押しかけようと総会で決定した、その当日のことだ。
水上　あれは生徒総会ではない、出席者数が規定の人数に達せず総会は不成立で、急拠生徒大会に切りかえられた。
岸田　そんなことはどうでもいい。十七台のバスを連ねたその当日、お前はバスに乗ったか。
水上　十七台のバスのうち、二十人、いや十人以上生徒が乗ってたバスが一体何台あったか？
岸田　問題をそらすな。当日、お前は来たか？　総会の決定に従ったか？
水上　良心の決定に従ったよ。
岸田　良心だと？　お前、それを恥かしいという気持もなしに言っているのか。
水上　十七台のバスを連ねて県教委まで押しかけて、で、どうなった？　教育長に面会してちゃんと話をしたのか。教育長はいたか。会ってくれたか。無理にでもいいから探しあてて会えたか。…なんにもありはしない、バスに乗って二時間ゆられて、向うでゾロゾロ歩いて、うろうろして、誰にもあえず、疲れて帰ってきた。それだけだ！
岸田　その間、お前は何をしていた？　お前は数人の裏切り者と一緒に小型トラックに乗って町々を走りまわって、生徒会誹謗の演説をしていた。
水上　誹謗などしない、自分の意見を喋っただけだ、自分の自由な意見を言うことがなぜいけない？どうして恥かしい？

岸田　町を廻ったその車はどうやって調達した？　金を出したのは誰だ？

水上　大げさなことを言うな。車は確かにある町の金持に貸してもらった、それが、どうしたというんだ。

岸田　それがどうしただと……本気でそんなことを言うのか。

水上　少くともお前たちとちがって、おれは自分の頭で考え、自分の言葉で話し、自分の気持で行動した。

岸田　おれが、すると、誰か他人のいいなりだったとでもいうのか。

水上　ちがうと言えるのか。

岸田　……水上よ、おれたちが、一部教師たちの煽動に引っぱりこまれたというのは、ちがうと思ってる。おれも、自分の考えで行動した。それは認めろ。

水上　……

岸田、水上にタバコを差し出し、火を点け、二人それぞれにタバコを吸う。

水上　……いま、なんで、こんな事やってるんだ。

岸田　……仕事だよ。

間。

岸田　……教えてくれないか。

水上　なにを？

岸田　咲子がどこにいるか。
水上　……
岸田　なあ、教えろよ！　……知ってるんだろうが……
水上　……知らない。
岸田　約束する。何を聞いても怒らない。お前が、咲子と……咲子の、たるんだあたりを撫でたとしても、怒らない、許す。昔、あの日、何があったとしてもかまわない、忘れる。だから、頼む、教えてくれ……
水上　もうやめろよ……せめて仕事をしろ。おれを取調べるのが、今のお前の仕事だろう。
岸田　……どうでもいいんだよ、こんな仕事なんか。……仕事だと？　おれが、こんなことをやりたくてやっていると思うのか。ちくしょう……なんで、おれが……
水上　サッコが言ってたぞ。
岸田　……なんて？
水上　……
岸田　早く言えよ！
水上　……岸田は、いい人だ……
岸田　嘘だ！　……お前、おれを、哀れんでいるんだろう？
水上　だけど、もう一緒には暮せない。
間。

岸田　……どうだった？　咲子は。
水上　……
岸田　どうだったかと聞いてるんだよ！　……よかったか？
水上　……ばかやろう。
岸田　よかったかどうかぐらい言ったっていいじゃないか。……言えよ。
水上　……
岸田　言えってんだよ！
水上　……お前、なぜ彼女がお前を捨てたのか判るか？
岸田　……
水上　いや、なぜ家を出たかをさ。
岸田　なんだというんだ。
水上　……お前が、そうやって疑ぐるからだよ。
岸田　だって、そんなこと言ったって――
水上　だってじゃないよ。
岸田　だけど……疑ぐらせるようなことがあるからじゃないか。あるんだよ。
水上　どんな？
岸田　例えば……さっきお前、撫でたと言ったじゃないか。
水上　嘘だよ。

岸田　じゃ何故たるんでると判った？
水上　想像したんだよ。
岸田　いや、ちがう。あの口振りは単なる想像なんかじゃない。
水上　おれが嘘だと言ってるんだから信用しろ。こういうことは、信じるしかないんだよ。
岸田　……時々会ってたろう？
水上　それは彼女だって隠しちゃいなかったろう。
岸田　……どこで会った？
水上　それをやめろと言ってるんだよ。
岸田　ずい分都合のいいことを言うな。
水上　……（手打ち）
岸田　それじゃ仕方がない。決め手を出そう。チェック・メイトだ。話は再び昔に飛ぶ。いいか。今度は西暦でいうぞ。一九六〇年九月三日の夜、七時から八時十分までの間、自治会室で一組の男女は何をしたか。窓の明りを塀の外から見ていた男の証言によれば、いいか、窓はずうっと閉め切ったままだった。これが大事なところだ。時は九月三日、夏だ、まだ充分夏だ、暑い、なのに一時間以上もの間窓を閉めたままだった。さあ、これをどう説明する！
水上　……岸田、お前、そんなことばかり思いわずらって毎日生きてるのか。どうかしてるぞ。
岸田　どうかしてもいい。説明できるならしてみろ。
水上　このごろ、自分の顔を鏡に映してみたことがあるか。一度映して見てみろ。

岸田　……なに言ってやがる。
水上　……塀の外の男が嘘を言ったのだったらどうする。
岸田　……？
水上　いくらだって説明はできる。だけど無駄だよ。そうだろう？
岸田　……どうしてだよ。
水上　今のお前には何を言っても判らないんだ。
岸田　今のおれが……どうだと言うんだ。
水上　それぐらい自分で判ってるんじゃないのか。
　　間。
岸田　……咲子は、おれを、助けてくれなかった。……おれが、こんな風になっちまって、もがいているのに、あいつは……
　　（歌う）

Do not forsake me oh my darling
いまの俺がいくらみじめでも
どれほど情けなくとも
いかにみにくく見えても
それは本当のおれじゃない

Do not forsake me oh my darling
いつかそのうちかならず
昔のおれを取りもどす
今の姿は見のがしてくれ
これは本当のおれじゃない

Do not forsake me oh my darling
だからいとしい人よ頼む
どれほど情けなくとも
いかにみにくく見えても
おれを今見捨てないでくれ

水上　……みじめな男というのは、あまり見よいものじゃないな。

岸田は黙ってタバコに火を点ける。

水上　……変ったな、すっかり。

岸田はゆっくりとタバコをふかす。

水上　……もう帰してくれないか。

岸田はタバコを吸っている。
しずかにタバコを吸っている。
やがて――

岸田　滝田だがな、会ったことは、あるんだろう。

水上　……会うわけがないと言ったのは、そちらだぞ。

岸田　大庭典子は四人の仲間と塾を開いていた。そのあがりを滝田に渡すわけだ。仲間はみな活動家というほどじゃない、お前に毛がはえた程度の連中だ。摘発されると、いっぱしに逃げやがったがね。そして捕まった。捕まると一応黙秘権の行使だ。一応やってみなきゃな。あんなものは一応やっとけば格好はつく。あと、喋って出てくればいいんだ。さて、お前も一応、黙秘ではなかったが尋問には答えない時間をかなり持った。もういいんじゃないか。タバコ、吸うか？

水上　いらない。

岸田　お前、使い走りをやってたんだろう？　どうだ？　で、それが恥かしいから答えない、ちがうか。

水上　……馬鹿を言え。

岸田　滝田に渡すべき金をどこかへ運ぶ、それがお前の役割だった。そうだろう。直接渡すような危ないやり方はしない、どこかコイン・ロッカーのような場所を利用するかした。しかし、それじゃどうもたよりなかろうから一度顔だけでもおがましてやろうてんで、ちらりと滝田先生のおでましだ。図星だろう。……だが、あまりいい印象は持たなかった。そりゃそうだよ、相手はお前

より年下だ。十年前、ビルを一つ爆破したってだけで、でかい面してやがる。まして、その男は典子の男だ、面白いわけがない。

水上　ゲスな見方をするんじゃない。

岸田　（笑って）塾は、お前の知ってた塾のほかに、少なくとも三つはあった。多分まだその上にあるかも知れないんだが、さて、その全ての塾に大庭典子は出入りをし、そしてだ、いいか。その全ての塾に一人ずつ男がいて典子をとめてやっていたというんだが、どう思う？　勿論、ただの素宿りじゃないのは、お前が一番よく知っていると、こういうわけだ。

水上　……嘘だ。

岸田　お前、こんだけ（指で三つ）だったって言ってたな。別の野郎はよ、（五本広げて一本足して）こんだけだって言ってたぜ。

水上　汚ない手を使うな。

岸田　そのセリフはあの女に言うんだな。

水上　黙れ、下司野郎！

岸田　事実は事実だから、しょうがねえや。タバコでも吸って落ちつけ。

と、タバコ一本差し出す。

水上は受けとり、火を点けてもらう。

水上　……典子は、おれを、好きだと言ってくれた。

岸田　そうだろう、そうだろう。

水上　嘘じゃないんだ。
岸田　判ってる。
水上　……あいつは……ある日、おれの目の前にあいつが突然現われたとき、ちりちりにちぢれた髪で顔が半分隠れてたけど、そのおかしな髪の毛の下からのぞいた目が、子供みたいに可愛いかった。その無垢な目差しに射すくめられて、おれは視線をはずすことができなかった。
岸田　なるほどね。
水上　それから、二人はよく逢うようになった。いつもあいつは元気で、あいつを見ていると心が洗われるような、そんな気持になった。
岸田　よっぽど汚れてたんだ。
水上　……疲れてたんだよ。
岸田　なにに？
水上　……なにもかもに。
岸田　で、新しい女と新しい生活を始めようと、そう考えた。古女房はいい面の皮だ。
水上　生活を変えたかった。
岸田　立派。見上げた根性だ。
水上　……女房にはすまないと思っている。
岸田　そんなことを思うことはねえよ。しょうがないよ。みんな、自分のやりたいとおりにやるしかねえんだから。

水上　このままじゃ、かえって女房にもすまない、そう思った。

岸田　うまい。うまい言い方だよ。なるほどね。情けないあり様を女房の前にさらしていては、幻滅を与えるだけだ、いっそ姿を消した方が相手を傷つけないですむ。女房も感謝しているんじゃないか。

水上　……

岸田　しかし、どうもよく判らんな。そんなお前が、どうしておれの女房に手を出した？

水上　……

岸田　どうしてだ！

水上　……淋しいっていうからさ。

岸田　……なんだと？

水上　淋しいというから、抱いてやったんだよ！

間。

岸田　……嘘だよ。ちがうね。むしろ、淋しかったのはお前だ。お前の心理をおれが説明してやるよ。聞いてろ。三十も半ばをとっくに過ぎてある日お前は、おれの人生はこれでいいのかとふと考えた。これが間違いのもとだな。そこで改めておのれの日々の生活をながめてみる。朝七時に起床してめし食って何の新たな気分もなしに通いなれた会社にでかける、以前は少しは苦労もあったし喜こびもあった仕事も今では一日々々惰性で動いてるだけだ、同僚と相もかわらぬ冗談口を叩いて、たまにはいさかいもするが、それで会社の何かを変えて行こうなんて気は起こらない、た

だ、いやだいやだと思うだけだ。行きつけの飲み屋で一杯やっても、心はずむわけもなく、ぼんやり時間を過して家に帰る。家では女房との間に話すこともないから、なんとなくテレビをながめて坐ってる。……女房の奴も、そこいらでぼんやりテレビを見ている。ちらっと目があうと、咲子の奴がおれを軽蔑してるのが、判る。おれだって、何もこのままでいいなんて思っちゃいない。でも、しょうがないじゃないか。……おれな、体制内変革をしよう、そう思って、ここにはいった。そんなおれの気持を咲子は理解してくれてたんだよ。でもなあ、世の中そんなに甘くない。しようがねえんだよ。毎日々々仕事に追われてよ……咲子、ほんとに、淋しいってか？　淋しいって言ったのか？

水上　……言ったよ。

岸田　嘘だ！　嘘だよ。淋しいのは咲子じゃない。おれだ！　おれだよ……

岸田、タバコに火を点ける。

岸田　……さて、仕事をしなくちゃ。

水上　お前、くるくる気が変るな。

岸田　これが、この仕事のコツよ。（笑う）

水上　……見習いたいよ。

岸田　けっこうお前もやってるじゃないか。おれの方が負けそうだぜ。

水上　……まだ何かあるのか。

岸田　なんにもまだ終わっちゃいないよ。

水上　なら、早くしろ。
岸田　あわてるなよ。ゆっくり楽しんでやらなくちゃな。
水上　……お前、楽しんでるのか。
岸田　当り前だろう。楽しくなくて、なんでこんなことをやってられる？　人生というものは、お前みたいに深刻な顔して苦しんだり悩んだりしてちゃ、間違いなのよ。ここに来たら、腹すえて、楽しくおれと付き合え、
水上　……願い下げにしたいね。
岸田　お前……典子に逢いたいだろう。え、どうだ？
水上　……
岸田　ほら、そんな顔してないで、逢いたいと言ってみろ。
水上　……
岸田　逢って、抱きたいのも抱きたいが、それより、今は確かめたいよな、相手の気持を。一体、おれを本当に好きなのかと。
水上　……ちゃんとした尋問をしろ。
岸田　……よし、判った。いくぞ。お前は、日本は今のままでいいと思うか？
水上　……
岸田　答えろよ。
水上　ふざけるんじゃないよ。

岸田　いえ、決して今のままでいいとは思っていません。そんな人が一体どこにいるでしょうか。ちゃんとそう言えよ。

水上　……いやな野郎になったな。

岸田　典子と女房とどっちがよかった？

水上　お前の女房とか？

岸田　（笑って）お、切りかえして来たな。そうこなくっちゃ。いいよ、それで。どっちだ？

水上　どっちだと思う？（と笑う）

岸田　……

水上　当ててみろよ。

岸田　……下らねえ話はやめだ。

水上　まあ、それぞれにいいところはあって、仲々甲乙つけがたいところだが――

岸田　黙れ、下司野郎！

水上　（笑う）

間。

岸田　お前、大庭典子が何をしている女か、初めから知っていたのか。

水上　……（うなずく）

岸田　背後に滝田という男がいることも？

水上　……（うなずく）

岸田　手伝おうと思ったのか？

水上　思った。この年になっては遅いようなもんだが、何かやりたかった。おれは、ビルを爆破することがいいことかどうか、そんなことは知らん、おれがやれと言われたら、多分やらんと思う、それは確かだ。滝田がそれをやったのは昔のことだし、奴は今逃げているだけだ。助けてやることが、何か意味があるように思えた。お前の言うとおり、おれにやれることは高が知れている。典子の生活を助けてやって、ちょっと連絡の代理をしてやる、その程度だ。それでもいい、そう思った。

岸田　……それで？

水上　……

岸田　生活は変ったか？

水上　……最初のうちは。

岸田　なるほど。……やがて、典子が寝てくれなくなって、お前の悩みが始まった。

水上　……（頭をかかえこむ）

岸田　志しは高かったのにな。……残念なことだ。

水上　……あいつの気持が、おれには判らなくなった。

岸田　だってお前、滝田という男がいることは初めから知ってたのじゃないのか。

水上　単なる活動の仲間だとそう思っていた。今でも、そう思いたい……

岸田　じゃ、そう思え。それが生きていくコツだぞ。思いたいように思う、やりたいとおりやる、そ

うしろ。

水上　……もう何がなんだか判らない……

岸田　こら、落ちこむな。さっきみたいに歌でも歌ってみろ

水上　だめだ……

と、この時音楽がひびき、歌をうながす。

水上　（歌う）

おれは今なぜ
落ちこんでいるのか
ちっとも判らないのです。
どうしていつもこうなのか
恥を知りたいものですね。

おれは今なぜ
苦しんでいるのか
見当もつかないのです
どうしてきょうもこうなのか
恥を知りたいものですね

おれは今なぜ
哀しんでいるのか
実は知っているのですが
どうしてあすもこうなのか
恥を知りたいものですね

水上　タバコくれよ。
岸田　元気でたか。
水上　出た。
岸田　じゃ、仕事にかかるか。
水上　まだやるのか。
　　二人、しばしタバコを吸う。
岸田　辻褄の合わねえことがあるんだよな。
水上　なんだよ。
岸田　お前は典子と同じ部屋に寝起きしている。半年前からだ。そうだな？
水上　（うなずく）
岸田　女房とは別れた。新しい生活を始めようというわけだから当然だ。そうだな？

水上　……（うなずく）
岸田　お前、うなずいたな。いいのか、うなずいて。
水上　なんのことだ？
岸田　だってお前、おれは調べたんだぜ。そしたら、女房とはまだ別れてない。どういうことだ、これは。
水上　それは、書類の上のことだ。
岸田　いつまでもほっとくのか。
水上　そのうち、ちゃんとするつもりだ。
岸田　どうかな。調べたというのは書類のことだけじゃないんだが、一言いっとこうか、その書類について。嫁さん言ってたぞ。早く離婚届にハンコを押してすっきりしたいといくら言っても水上がそうしてくれない。……それから、よく会いに行くんだってな。たまには泊ってくそうじゃないか。それも素泊りじゃなくて……。どういうことだよ！　はっきりしろよ、てめえ！
水上　……たまに行くのは、子供に会おうと……子供は可愛いいから。
岸田　じゃ。子供を抱いて寝りゃいいじゃないか。ふざけるな……
水上　おれが、家に帰って何をしようと、お前の知ったことか！
岸田　……なんだと？
水上　おれと女房がそれでよけりゃ、それでいいじゃないか。
岸田　……（間）歌でも歌いたくなったよ。

と、即座に音楽がはいる。

岸田　（歌う）

恋とは何なのでしょう
はた迷惑な
ほんとうかと見えて
でたらめで
嘘かと思えば
泣いている

恋とは何なのでしょう
はた迷惑な
いつまでもと言いつつ
あくびをし
終ったと思うと
燃えている

恋とは何なのでしょう
はた迷惑な

別れたと言いつつ
追いかけて
好きかと思えば
逃げている

岸田　お前、もう帰るか。
水上　……
岸田　どっちへ帰ろうとお前の勝手だが、帰る前に一つ話してゆけよ。滝田に金を渡す時の中継場所だが、知ってるんだろう。
水上　……滝田には会った。会わせてくれるように、おれが典子に頼んだんだ。
岸田　……いつ？
水上　五月五日、子供の日。
岸田　どこで？
水上　馬場のコーヒー屋。
岸田　何時？
水上　朝の九時、開店と同時にしたいとおれが頼んだんだ。
岸田　どっちが先に待ってた？
水上　四十分待たせてやったよ。

岸田　……じらして、揚句、平然とした顔ではいって行った。作戦だな。
水上　……
岸田　大庭典子をよろしく、別れぎわにそうカッコウつけて言ったのは、するとどっちだ？
水上　……
岸田　タバコの吸いがらで山をきづいたのは？
水上　……
岸田　みんな、お前の方か。……どうしょうもねえな。
水上　偉そうなことを言うんじゃない！　おれがみじめったらしいってか？　手前とどこがちがう。
岸田　いいよ、判った。それより、滝田との中継場所だ。言って帰れ。
水上　どっちへ帰ろうとおれの勝手だと言ってくれたが、もう一つ別に帰るところがあるんだぞ、判るか。
岸田　……なに？……お前。
水上　（笑っている）……教えてやろうか。
岸田　やっぱり知ってたのか。
水上　淋しいから、一緒に暮らしてほしいと言われてるんだよ。そうしていいか？
岸田　やろう……！

と、岸田が水上につかみかかり、そのまま床に倒れこんで組んずほぐれつ、喧嘩となる。
いい勝負だが、やがて、水上が岸田をおさえつける。

岸田　おい、ちょっと、おい。……あれは？　あの音は何だ？

二人、耳をすまし、岸田、立ち上がりイスにつき、水上も。二人、目が合い、笑う。

岸田　思い出したか。

水上　昔、ケンカに負けそうになると、よくおれが使った手だ。

岸田　小学校のころだよな。

水上　よく覚えてるもんだな。

黙って二人、タバコを喫う。

静かに音楽がはいり

二人の歌。

おだやかな心の今
お前に逢いたい
強くゆたかな思いに
さわやかな気持の今
大事なお前に逢いたい
間もなくまた
自分を見失ない
みじめな姿をさらす

恐ろしい時がおれをおそう
その前に　その前に
いとしいお前に逢いたい
間もなくまた
自分を見失ない
みじめな姿をさらす
恐ろしい時がおれをおそう
その前に　その前に
いとしいお前に逢いたい

二人、向い合って坐って、

水上　……これで、さよならしたいな。
岸田　それができたらな……
水上　……たるんだ辺りをどうしたというのはな――
岸田　言わなくていい。……（指を五本広げて一本足して）この話はな――
水上　聞かなくていい。
岸田　……なにか方法はないか。
水上　なんの？

岸田　今の、この気持を、持続させるための。
水上　だから、これで、さよならしよう。
岸田　それができたらな。
　岸田、マッチの箱をもてあそぶ。
　その単調な音。しばらくつづく。
　互いに相手に視線を走らせる。
　そのうち二人の視線が合う。
　視線がつめたくからみ合う。
水上　なんだい？
岸田　……
水上　なんだよ？
岸田　……気にくわねえな。
水上　何か言いたそうに見えたからさ。
岸田　言いたいことなどないね。……この下司野郎が。
水上　……ぎくっと体がふるえるよ。ハハハ。
岸田　こっちは体の芯のところで魂がふるえっぱなしよ。いやな野郎のお相手でさ。しかも、その相手にこっちが軽蔑されてるんだぞ。ちくしょう。
水上　なら、いつまでも何をやってるんだよう！　早くやめて帰せばいいだろう。

岸田　まだ終ってねえんだよ。
水上　なんでも喋るから、早くきけ。
岸田　お前、なんのために生きてるんだ。
水上　……
岸田　言ってみろよ。なんでも喋ると言ったろう。
水上　……お前なんかにそんなことが言えるか。
岸田　教えてほしいんだよ。ほんとうだぜ。友だちだろ。
水上　……ちゃんとした尋問をしろ！
岸田　そのセリフ、前にも言ったな。頭が悪いぞ、お前。
水上　うるさい。
岸田　ちゃんと答えろ。お前は、なんのために生きてるんだ？
水上　……
岸田　答えられないのか。
水上　……お前は？
岸田　こっちが聞いてるんだよ。
水上　何故そんなことを、お前が今、おれなどに、こんなところできくんだ。
岸田　いいよ、もう。もうきくこともない。どこへでも帰っちまえ！
水上　……滝田の連絡場所、知りたくないのか。

岸田　お前が知ってるわけないだろう。
水上　……会ったって言ったろう。
岸田　それも嘘だよ。
水上　嘘じゃない。
岸田　滝田は立派な男だぞ。なんでお前なんかと会う？
水上　お前、奴を知ってるのか？
岸田　知らなくても判る。少なくとも奴は、お前のような男がくっついていても、典子を疑がってなどいないだろう、立派だよ、お前に真似ができるか？
水上　（笑う）大した野郎じゃねえよ。奴は典子を利用してるんだ、だから、何があっても平気なんだ。それだけだ。
岸田　ちがう。十年だぜ、十年、二人は一緒に逃げているんだぞ。単に利用してたり、されたりという仲じゃない。
水上　いや、ちがわない。……典子はおれの女だ！
岸田　もういい。帰れ。
水上　滝田にも会った！　連絡場所は馬場のコーヒー屋だ！
岸田　うるさいな。帰れよ、もう。
水上　おれの言うことを信用しないのか。
岸田　しない。

水上　……なぜだ！

岸田　……

水上　偉そうな顔しやがって、お前はおれとどこがちがう、おんなじ下司野郎じゃねえか。くそ！

岸田　おれと同じような奴は、おれは嫌いなんだ。たまんねえよ、そういう奴を見ているのは。早く帰れ！　失せろ！

間。

水上　……これで、さよならしたいなと言ったとき、どうしてそうしなかった？

岸田　そんなこと、知るもんか。

水上　咲子の居所を聞きたかったからか？

岸田　ばかやろう……

水上　……言っとくけどな、岸田、おれ、あの時だって、いつだって、真剣に生きてきた。

岸田　判ったよ。

水上　嘘じゃないぞ！　真剣に生きてきたんだぞ！

岸田　判ったから、タバコでもどうだ。（と差し出し）タバコでも吸って、くるっと気持を変えてくれよ。真面目な話は気味が悪い。真剣に生きてきたなんて、お前、恥かしくないのか。

水上、タバコを吸って、

水上　おれ、今、そんなこと言ったか。

岸田　言った。

水上　へえ、気がつかなかった。
岸田　上出来。
水上　馬鹿なこと言ったもんだよ。なんだって？　真剣に生きたって？
岸田　いつだって。
水上　おれが？
岸田　お前が。
水上　ほんとか？　ほんとにそんなこと言ったのか。
岸田　考えられないよな。
水上　お前、耳、おかしいんじゃないのか。
岸田　いや、ちゃんと聞いたぜ。
水上　だってお前、なんでおれが、真剣に生きてきたなんて言う？
岸田　おかしいよな。
水上　言うわけないよ。からかってるんだろう。
岸田　なんで？
水上　なんでだ？　なんで、からかった？
岸田　だから、なんで、おれがお前をからかう？
水上　それをこっちがきいてるんだよ。
岸田　理由がないよ。あるか？　あるわけないだろう。

水上　じゃ、なんで言いもしないことを言ったなんて言うんだ。
岸田　……言ったんだよ。
水上　おれが？
岸田　いつだって真剣に生きてきたってさ。笑わせるよ。
水上　ほんとか？　ぴっくりするな。おれが？　真剣に？
岸田　気をつけろよ。気をつけないと、人に笑われるぜ。
水上　お前、冗談言ってるんだろう。
岸田　冗談？
水上　だって、おれ、そんなこと言ってないぞ。
岸田　……
水上　言ってない。言わなかった。間違いなし。なんでからかう。
岸田　……言ったんだよ。
水上　言いません。であるのに、なにゆえに言ったなどと、おからかいになるのでしょう。
岸田　やめろ。
水上　わたくしが真剣に生きて来たと言ったら、しかし、おかしいのでしょうか。
岸田　あたり前だ。
水上　なんでだ！
岸田　……

水上　なんでおかしい！
岸田　話をもどすぞ。
水上　……どこへ？
岸田　馬場のコーヒー屋だ。なんという店だ？
水上　きいてどうする？
岸田　どうもしない。きいて欲しかったんだろう、だから、きいてやってるんだ。なんという店だ？
水上　……
岸田　話せよ。
水上　話したくない。
岸田　どうして？
水上　……お前、興味があるのか。
岸田　ある。
水上　おれは、ない、なくなった。
岸田　……そうか。
水上　なくなっちまったよ、なんにも。
岸田　……困ったな。
水上　タバコくれ。
　火を点けてやる。

岸田　（指を五本広げて一本足して）この話だけどな。事実らしいぜ。

水上、黙ってタバコをふかしている。

岸田　事実。ほんとう。

水上、反応なし。

岸田　大庭典子、どこへ消えたのかな。多分、滝田と一緒だ。滝田の女だからな。

水上、無反応。

岸田　お前は利用されたんだ。……（いきなり、バンと机を叩く）これでもだめか。

水上　……ちょっとびくっとしたよ。

岸田　よかった。（もう一度叩く）

水上　ああ、びっくりした！

岸田　……絶望的だな。

水上　……やれよ、尋問のつづき。

岸田　今、考えてる。

水上　何かいい手があるか。

岸田　……お前、典子に、水上さんていい人ねなんて言われたろう。で、苦笑しながらけっこう嬉しい気がした。

水上　……

岸田　図星だろう。
水上　それがどうした。
岸田　ほんとに嬉しかったのか。
水上　……
岸田　情けないよな、いい人だなんて言われて、喜こんでるなんて、馬鹿じゃないか。
水上　喜こんでなどいない。
岸田　お前、第一、いい人なのか。
水上　……そうだよ。それがどうかしたか。
岸田　すると世の中はいい人だらけで、こりゃ、けっこうだね。
水上　お前も、そうなんだってな。
岸田　おれが？
水上　咲子がそう言ってた。よかったな。
岸田　……ほんとうに言ったのか。
水上　嬉しいか。
岸田　ひでえことを言いやがる。
水上　けっこう嬉しそうじゃないか。
岸田　おれはお前じゃない。
水上　どうだか。

岸田　ほんとうなのか。ほんとに言ったのか。

水上　……いい人が、二人そろったってわけだ。

間。

音楽が始まり、歌になる。

おれとお前、二人とも
いい人なんだってさ
笑わせるよな
するとお前、世の中は
捨てたものじゃないってさ

おれとお前、二人とも
いい人なんだってさ
泣けてくるよな
するとなにかおれたちは
素敵なこの世の代表なのか

おれとお前、二人とも
いい人なんだってさ

馬鹿にするなよな
ところでそれは、どいつだよ
会ったらただじゃおかねえぞ

岸田　……仕事をやるぞ！
水上　こい、ちくしょうめ！
岸田　滝田には会ったといったな。
水上　それがどうした。
岸田　言え！　どこのサテンだ。
水上　忘れた。覚えてない。
岸田　隠すんじゃない、この下司野郎が。
水上　うるせえ。
岸田　てめえのような何にもできねえ腰ぬけが突っぱるんじゃねえよ。
水上　お前なんかに話すことなど、何もない。あきらめろ。
岸田　馬場のどこだ？　ルノアールか？　ユタか？　ラビアンローズか？　白鳥か？　白いバラか？
　アインか？　吉野園か？
水上　全部ちがう。
岸田　ノーパン喫茶か。

水上　まさか。
岸田　だろうな、そこいらがお前のダメなところよ。
水上　真面目にやれ。
岸田　お前、人生をなんだと思ってるんだ。
水上　真面目にやれと言ってるぞ。
岸田　真面目にきいてるんだよ。人生をなんだと思ってるんだ。
水上　用がないなら帰るぞ。
岸田　逃げるな、卑法者。
水上　黙れ！　下司野郎！
岸田　よし、質問を変えるぞ。ほんとに滝田に会ったのか。
水上　ほんとだ！
岸田　いつ？
水上　五月五日！
岸田　どんな話をした？
水上　言ったろう、さっき。
岸田　つまらん話ばかりだ。もっと話したろう。
水上　たとえば？
岸田　今度、奴が、何をしようとしているのか。

水上　知らない。
岸田　話してくれなかったのか。
水上　覚えてない
岸田　なんにも話してもらえなかった。そうだろう？
水上　話したよ。
岸田　嘘つけ！
水上　嘘じゃない。
岸田　じゃ、なんだ、言ってみろ。
水上　お前などに言っても判ることじゃない。
岸田　おれ、日本人だぜ。
水上　だから、どうした。
岸田　聞けばなんでも判るぜ。
水上　判んねえよ！
岸田　吐いてしまえよ！
水上　覚えてないんだよ。
岸田　全部が嘘か。
水上　ちがう！
岸田　典子ってのは、ところで、ほんとに滝田の女なのか？

水上　そうだ。
岸田　いいのか、認めて。
水上　そうだが……そうじゃない。
岸田　どっちだよ。
水上　滝田という男はいる。それは事実だ。
岸田　ほんとか？
水上　そしてそいつに典子という女がいた。
岸田　たしかなのか？
水上　おれは、その典子に逢った。
岸田　嘘だろう。
水上　ほんとだ！　全部ほんとだ！　ほんとにあったことだ。
岸田　信じられないな。
水上　じゃ、お前はなんでおれを尋問してるんだ！
岸田　尋問なんかしてないぜ。
水上　じゃ、なんだ、これは。
岸田　同窓会だよ。
水上　……滝田はいる、典子はその女だ、おれは二人に会った。
岸田　嘘だよ。お前、どうかしてるぞ。

水上　どうしたんだ、何を言ってるんだ！　滝田はほんとにいるんだ。典子だってちゃんといる、お
れは会った。
岸田　夢でも見たんじゃないのか。
水上　くそ！　どういうつもりだ！
岸田　どうもしない。全部うそだ！　……うそだよ！
水上　……判った。お前、おれに嫉妬してるんだろう。
岸田　馬鹿をいうな！　なんでおれが、お前なぞに！
水上　可哀そうな男だな。
岸田　可哀そうなのはどっちだ！　ありもしないでたらめばかり言いやがって。
水上　全部、ほんとだと言ってるだろう！
岸田　うそっぱちだよ！
二人、立ちあがってわめく――
ストップモーション。